

特集「社会的共生と感情」

澤田匡人 (宇都宮大学)

石川隆行 (宇都宮大学)

「共生」もしくは「共生関係」とは、もともと生物学の用語で、複数の生物種が共に生きている関係を表す。「寄生」や「競争」のように、片方が利して、もう片方が搾取されたり、何かを巡る争いの末に双方が傷ついたりするようなケースもあるが、これらもまた共生の一形態である(深津, 2004)。

日本感情心理学会第22回大会では、共生に「社会的」を冠して、異なる主義、主張、属性を有する個人や集団が、一定の対等な関係をもって生活できる状況とみなし、いくつかの講演やシンポジウムが企画された¹。その大半はいじめや紛争など、(社会的)共生の難しさを問いかけるものとなったが、共感のような直接的な関与が想定される概念も取り上げられた。

もちろん、共感によって社会的共生が首尾よく実現されるかといえ、それほど単純な話でもない。共感は選択性・限定性を有するものであって、内(友)にはやさしさを提供すると同時に、外(敵)には冷酷非情さをも呈する「諸刃の剣」となる。しかも、「友」と「敵」を峻別する境界線として嫌悪感情が利用されてしまう。

社会的共生を語るの、おそらく健康と不健康の違いを論じるのに似ている。健康な状態とは、ポジティブ思考で元気澆刺に跳ね回っていることを必ずしも指すわけではない。また、健康の増進といっても、通常は不老不死を目指すものではなく、罹患リスクの低減などによって記述される。要するに、健康を定義するのは困難を伴うが、健康で「ない」状態を語るの、容易いということだ。むしろ、不健康と見做される痛みや症状が出た瞬間にこそ、種々の症状に苛まれない平穏さ、すなわち「健康」とは何が浮き彫りとなる。

この特集で共生を論じるにあたって、性的マイノリティへの「差別」や学校における「いじめ」が組上に載ってくるのは当然の成り行きである。健康と不健康の違いのように、共生が脅威に晒されているか否かは、他者や集団に向けられた冷たい視線や偏見によって詳らかにされるからだ。しかも、共生できない者を「敵」とみなす感情は、「友」が属する集団内で共有される。それが嫌悪や怒りをまとった「集合的感情」

となれば、鋭い刃物と化して躊躇なく振り降ろされるに違いない。

敵と共存する！反対者と共に政治を行う！このような愛は、もはや理解しがたいものになり始めているのではなからうか？…(中略)…大衆は——その密度とおびただしい数を見ればとても考えられないことなのだが——大衆でない者との共存を望んでいないのだ。大衆でない者を徹底的に憎んでいるのである(Ortega y Gasset, 1930 桑名訳 1969, p. 126)。

スペインの哲学者の言葉は、グローバル化が叫ばれて久しい現代にも通じる警鐘かもしれない。そもそも、私たちは自分たちと異なる者との共生を本当に望んでいるのだろうか。また、仮に共生を求め続けたとして、その先に待ち受けている世界は、平等が具現化されたユートピアなのか。それとも、いかなる不一致も許されないディストピアなのか。

こうした難しさを孕む概念であるからこそ、「社会的共生と感情」は、創刊号で取り上げるに相応しいテーマといえる。名状しがたい社会的共生とは果たして何なのか。この特集では、22回大会で講演、話題提供、指定討論をいただいた第一線で活躍する研究者たちが、様々な切り口からこの問題を論じている。これらの議論を通じて、共生の難しさと奥深さ、さらには共生に関わる問題と「感情」との結び付きについて考える機会を読者に提供できれば幸いである。

引用文献

- 深津武馬 (2004). 共に生きるということの本質 本, 29, 42-44.
- Ortega y Gasset, J. (1930). *La rebelión de las masas*. Alianza Editorial Madrid.
(桑名一博 (訳) (1969). 大衆の反逆 オルテガ著作集2 白水社)
- 中村 真 (2015). 学際的, 異分野融合的感情研究の可能性と意義——「社会的共生と感情」を手がかりに—— エモーション・スタディーズ, 1, 63-72.

¹ なお、大会企画の説明と個々の論文へのコメントは中村 (2015) に詳しいので参照されたい。